

**留学先国名** : オーストラリア

**留学先学校名** : 南オーストラリア大学

**留学期間** : 平成 27 年 2 月 14 日 ~ 平成 27 年 11 月 31 日

十一月の最終日にアデレードを出発し、その翌日十二月一日に帰国いたしました。

この一年は私の人生にとっての分岐点のようなものでした。交換留学経験が高校と合わせて二回経験した中でどちらも私の将来を大きく変えるものでしたが、今回は自分のこれから社会人、大人になるうえでの課題がよく見えた留学生活だったなと思います。私の所属している国際学部はいろんな分野の知識が得られるところが良いところのはずが、私の場合はそのあやふやで統一感のない履修内容から自分が一体何に興味あるのかという事がわからなくなっていました。そこからなにか一つでも集中して掘り下げられる分野が欲しいと思い、この留学を通して南オーストラリア大学に学部のある観光学を核にした履修をしようと決めて渡豪しました。

勉強面では、前述のとおり観光学をメインにしてそれと併せて国際学部での学びから乖離しないようにカリキュラムを立てました。Term2（最初の学期）はオーストラリアについての知識をしっかりとつけようと、基礎的な授業を中心に履修しました。一つの学科にとらわれずに履修したので自分に合った科目を選択することができて勉強が楽しいなと思えるほど充実していました。その反面、色々な学部の基礎の授業をとったので詰め込まれる情報の量が半端な量ではなく、そのうえ課題も全部の授業が多くて大変な内容で、計画性と集中力、そして精神、体力勝負の日々が続きました。ある時は腹痛に耐えながら、またある時は眼精疲労からくる頭痛になんとか耐えながら課題を提出するという限界まで追いやられる体験をしました。そのおかげで日本の大学では経験できなかった達成感や努力することの大切さを身に染みて感じることができました。Term5（二学期目）はその term2 で養った知識を発展、そして掘り下げることには焦点を置きました。そのかわりに最高四つとれる授業の個数を三つに減らして集中することにしました。一つは現地の三回生がとる授業を、他の二つは先学期に履修した科目の発展的な授業を履修しました。この学期で大変だったのは、人と関わりあって何かを成し遂げる、ということでした。プレゼンテーションや課題など、グループとして作り上げるものがこの学期では多く、他の人どう連携をとっていくかという事に苦戦しました。そこで学んだのは、妥協するという事です。勉強について妥協をするわけではなくて、人を赦すという意味で自分の心を寛大にする必要性を感じました。自分一人で作るものではないものであるだけに、どうしたいかなどの考えを伝えてそれを課題内容に組み込むのは簡単そうで難しいことです。人それぞれの考えや解釈があり、皆が全く同じ価値を持ち合わせているわけではありません。多民族国家のオーストラリアでは特にその考えが必要になってきます。これを通じて、人に対する対応や考えは留学前と大きく変わったと思います。

勉強以外の生活では、たくさんの出会いがありました。まず寮生活でしたので一緒に寝食を共にする仲間とは自然に近い存在になっていました。そのなかでもマレーシアから来た友人たちとは本当に仲良くなり、

この一年間の留學生活において数え切れないほど手を貸してくれて、そのうえにたくさんの時間を共にした最高の仲間でした。民族や育ってきた背景は違えども、仲間という意識や分別はどの国に行っても同じなのだろうなと実感しました。私の周りには白人の友人よりも国際的な友人が多かったです。アフガニスタンからやってきた子、アメリンディアンの子など私と同じオーストラリアではマイリテイな人種の子たちと仲良くなれる機会が多かったように思えます。そしてこのオーストラリアの地で人生を共に歩みたいと思える存在にも出会うことができました。留學生活において、わたしは人との出会いに恵まれているなと思います。その人たちがいないと私の充実したオーストラリアでの生活はなかつたろうし、心から感謝しています。人と出会うことは偶然にも等しいほどの貴重な機会です。オーストラリアにてできた友人たちを通してより人に対しての感謝の気持ちが増しました。

これから留學される方になにかアドバイスできることがあるとするなら、何事も計画性を持って、最初にその留學を志したときにその経験において自分たちがなにをそこで成し得たいのかという事をいつも心のどこかにおいて生活をしてほしいという事です。海外での生活は魅力的で時に羽目を外したくなることもあると思います。しかしそこで自分が最初に志したことを思い出すと自分自身にある程度歯止めがつかます。

このオーストラリアでの生活は、一生懸命という言葉が一番合うような日々でした。何事にも一生懸命に取り組んで、それでもたらされた結果に一喜一憂するときもありましたが、ゆるく本気でぶつからなくて与えられた結果よりもっと意味があって、自分の経験値としての身となり肉となり、日本で忘れかけていた一生懸命に取り組む大切さを思い出させてくれたような気がします。これから日本で生活するうえでも、これからの人生を歩んでゆくうえでも大切な自分の中の芯が固まった留學生活でした。